

秋田丸善繊維株式会社

大館市比内町扇田字本道端5-1

検反から裁断までのボトルネックを解消し、増加している多品種少量短納期生産に対応

【事業計画名】高級婦人服の多品種少量短納期生産体制確立事業



工員の身長に合わせ、高さを調整した検反縮絨機



導入した自動裁断機

取り組みの経緯

秋田丸善繊維は各種特殊ミシンを活用した高い技術力を有する縫製事業者である。仕様書に明文化されていないブランドが求める「感性」を表現することができる工場として評価が高く、国内の高級婦人服ブランドを手掛けている。かつてはブラウス専門工場として業界内で一定の地位を得ていたが、トレンドサイクルの短期化や消費志向の変化に対応すべく、現在はドレスやワンピース、ジャケット、コート、ブラウス、スカートなど季節毎の幅広いアイテムに対応している。

消費者ニーズの変化にともない、多品種少量での受注が増加。これに対応するため、生地を検反（検査工程）や延反（延ばし、重ねる工程）の精度を高める必要があったほか、縮絨（生地の歪みやしわを取り、蒸気と熱で伸縮性を安定させる工程）および裁断工程の生産性を高めるため、本事業への取り組みを検討した。

実施内容

これまでは、検反・延反で生地の不良箇所を二重チェックしていたが、不良個所に貼った目印シールの剥がれや見落としが発生していた。また、縮絨設備を保有していなかったため、同業他社に生地を持ち込み、外注対応していた。そこで、検反装置付き小型縮絨機を導入。検反能力の向上で生地不良の見落としが無くなったほか、延反の作業効率も向上した。また、縮絨工程の内製化で外注先への生地運搬が不要となり、作業時間が短縮したほか外注費抑制に繋がった。

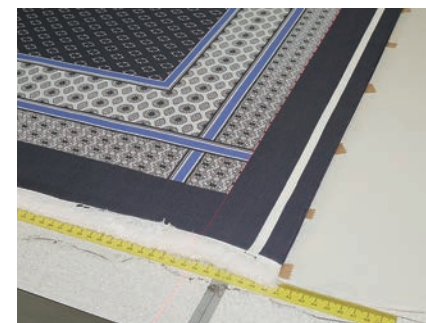
多品種少量の受注増加にともない、裁断の作業量が増加。裁断は作業量全体の約3割を占め、ボトルネックとなっていた。そこで、裁断能力が従来比2倍となる最新の自動裁断機を導入。素材や生地の厚さに応じ、吸引搬送速度や裁断速度を調整し、最適な条件を設定したことで裁断時間が従来比約50%短縮可能となった。

事業の成果

従来から難素材にも対応可能な縫製の技術と生産能力に定評があったものの、検反から裁断までがボトルネックとなり、強みを活かしきれていなかった。検反から裁断までの時間が大幅に短縮し、縫製の生産性が向上したことで、多品種少量の受注にも短納期対応が可能となった。また、増加傾向にある生地不良への対応に注力しており、縮絨機を調整して自社で生地の織り目曲りを修正することが可能となった。現在、外部講師を招聘し、生地のプリントミスや汚れがあった場合の修正技術の指導を受けている。今後は生地不良発生時の時間短縮に加え、さらなる収益力強化を見込んでいる。



ブランド毎に担当者を配置し、感性を表現



レーザーマーカを使用した柄合わせ



負担軽減を目的に導入したデジタルミシン

産休・育休の取得はもちろんですが、女性が多い職場であるため保育手当の支給や子供の看護休暇、短時間勤務、学校行事への参加配慮など仕事と家庭の両立を支援しています。また、サンプル作成時の縫製データ共有により、量産時に素材に合わせた最適な縫製が可能となるデジタルミシンを導入するなど従業員の負担軽減に繋がる設備投資も行っています。

今後も経営理念である「従業員の子弟も勤務できる環境づくりをしよう。」を実践できるようハード・ソフトの両面で働きやすい職場づくりに取り組みます。



代表取締役
竹村 周夫さん

今後の活動予定

2006年稼働の中国・大連工場では、当社に勤務した実習生が帰国後に工場長や幹部として勤務し、日本と同等の品質を提供している。リバー仕立て（2枚の布を1枚として縫いたてる高級な生地）や手刺繍、ビーズ刺繍など手間のかかる縫製を主に手掛けており、時間やコスト、工数のバランスで国内工場とすみわけしている。

「繊維ファッション業界はトレンド変化が速く、自助努力だけでは先を見越した対応が遅れがちになる。自社単独では時間やコストの面で対応が難しい場合もあるが、外部の支援を有効に活用し、経営力強化に繋げていきたい。」と竹村社長は語る。



秋田丸善繊維株式会社

代表者	代表取締役 竹村 周夫
設立	昭和44年9月
資本金	1,500万円
従業員数	77名
業種	繊維工業
TEL	0186-55-1205
FAX	0186-55-1206
URL	www.akimaru1969.com